

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

第 132 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成15年 6月21日

ム ナ グ ロ



2002. 9. 23 渡島管内砂原町砂崎 撮影者 村上トヨ

〒003-0022 札幌市白石区南郷通16丁目2-9



も く じ

コヒバリの観察記録	道川富美子	2
私の長流川発見(地域生態系の発見)		
	篠原 盛雄	3
鳥獣保護法の改正について	岡田 幹夫	7
平成15年度総会報告		8
北広島市若葉町周辺を利用する野鳥について		
	先崎 啓究	10
探鳥会ほうこく		12
探鳥会あんない		16
鳥民だより		16

コヒバリの観察記録

道川 富美子

2003年4月2日午後3時頃、石狩支庁管内当別町美登江を走行中、コハクチョウ100羽程度の群れを見かけたため車を止めました。雪解けが進んでいる頃で、コハクチョウは雪が残る水田のぬかるみで採餌していました。

群れの端で採餌していた数羽を一見ヒバリとしましたが、何となく見慣れている動きと違っていただけから、図鑑と参照しながら双眼鏡、望遠鏡で観察したところ、それらがヒバリではなく、コヒバリと分かりました。

日本全体をみてもコヒバリの観察記録は少なく、北海道では3例が報告されているのみようです(注1)。日本へは1羽か数羽で飛来することが多いとされています。今回30羽ほどのやや大きな群れであったことで、今後の参考になれば幸いです。

近縁のヒバリ、ヒメコウテンシと比較的似ているため、コヒバリと判断した主な点をあげておきます。

- (1) 胸の褐色縦斑が明瞭で、この点でヒメコウテンシではないと判断。ヒバリよりやや色が濃く、はっきりとした印象でした。
- (2) ヒバリに見られる赤褐色で無斑の小雨覆と中雨覆があ



りませんでした。

- (3) くちばしが太く、ヒバリより短いことや、目の雰囲気などから、ヒバリより可愛い感じを受けました。
- (4) ヒメコウテンシとの識別点に使われる、“三列風切が短かめで、静止時に初列風切の先端がよく見える”特徴を持っていました。
- (5) “背、肩羽の縦斑が細くて先が尖る”特徴を持っていました。
- (6) ヒバリより姿勢が低く、膝を深く折っているような感じで歩き回っていました。
- (7) 水田のやや乾いたところで採食していました。おそらく落ち穂を採っていたと見られ、“主にイネ科植物の種子を好む”とされる習性と一致しています。
- (8) 一瞬、冠羽を立てるのを見ました。ヒバリより短い冠羽でした。
- (9) コハクチョウの写真の撮るため畦道に入った人がいて、コヒバリだけが飛び立ちましたが、その時ブリッと鳴き、ヒバリの飛び立つときの声とは異なっていました。また、合わせておよその個体数が分かりました。

記録のため、30倍望遠鏡にデジタルカメラを当てて写真を撮りました。掲載写真でははっきりしませんが、実際の写真ではコヒバリの諸特徴が確認可能でした。

(注1)

網走(北海道地域別鳥類リスト, 日本野鳥の会北海道ブロック支部連絡協議会, 1991)

奥尻島, 1991年10月29日(佐伯彰光, 野鳥情報, Strix 11, 1989)

根室市春国岱, 1992年2月(高田令子, 根室支庁管内鳥類リスト, 根室市博物館開設準備室紀要 第15号, 2001)

〒061-3777 石狩郡当別町スウェーデンヒルズW1-2-6

私の長流川発見（地域生態系の発見）

日本野鳥の会室蘭支部 副支部長 篠原盛雄

1) 伊達の自然

伊達は東側に700m前後の山々が連なり、北西側に700mあまりの有珠山が噴煙を上げています。長流川はその間を支笏湖のあたりを源に南北に50kmにわたって周辺の水を集め内浦湾に流れ込んでいます。伊達はこの長流川をはじめ中小の河川の沖積平野として南に面して広がっています。そのため6月オホーツク高気圧から吹き出してくる冷たい湿った風は東側の山々に遮られて登別、室蘭に冷たい雨を降らせます。伊達は晴れの日が多いのです。冬は北西の有珠山がやはり雪を遮って積雪を少なくしています。南側は海に面していますので1年を通じて夏は涼しく冬は暖かい海洋性の気候となります。1年の最低気温が-10℃程度（1年に数度）です。長流川が全面凍結することは殆どありません。

伊達市は明治3年仙台藩の支藩の1つである亶理藩の武士たちが戊辰戦争に敗れ、新天地を求めて開拓に入り開拓に成功して出来上がった町です。その当時はうっそうとした原始林に覆われていましたが、開拓が進み、明治40年には本格的な稲作もできるようになり、優良な農村として発展してきました。伊達は開拓の歴史が北海道の中で早い方で、途中いくたびもの戦争もあり、山も含んで周辺の原生林はことごとく切られました。さらに高度経済成長以降のコンクリート潰けで河川海岸線はことごとく荒らされ、伊達の自然度はかなり低くなっています。

2) 長流川発見

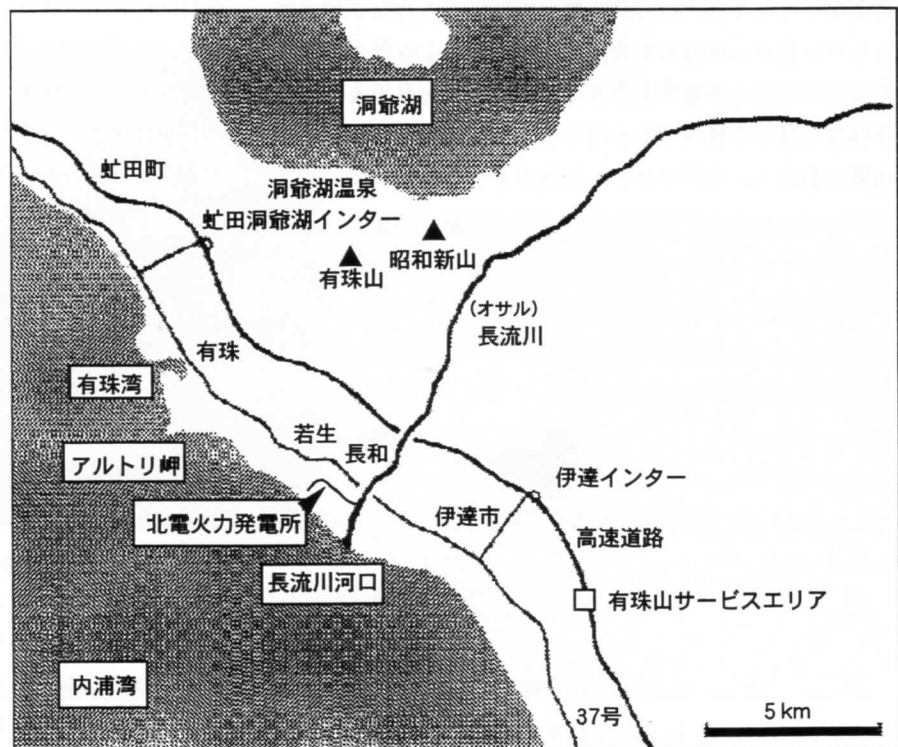
私はいま伊達に居を構えています。私は転勤族で13年前に伊達に住むようになりました。

高校は伊達高校を卒業しましたが生まれは洞爺湖の洞爺村です。伊達という町は人の住む近くに自然が豊かなところがあるという状態ではなく、伊達の自然は貧弱だというのが私の認識でした。元から自然が大好きで、山登り、山菜取り、きのことり、野草、高山植物観察など1年中

山に入って生活していましたが、8年前小学校3年の娘の冬休みの自由研究の宿題に付き合っ、長流川に白鳥の観察に行ったのが長流川との付き合いの始まりでした。

現在の長流川は河口から2kmほどが10年前に洪水対策としてしっかりコンクリート化され、国道の橋、JRの鉄橋、北電火力発電所のパイプラインが横断しており、河口の西側には製糖工場、東側には下水処理場とすっかり人工物に覆いつくされています。自然に親しんでいる私にとってはまったく行く気の起こらない所でした。ところが白鳥を観察しに行ったところ、いろんなカモが沢山いて、それ以降は図鑑と、双眼鏡をしっかり準備して娘と一緒に野鳥観察をすることとなりました。観察を何度か続けるうちに思いもよらないほどの野鳥が観察され、それまでの長流川の認識を変えざるを得ませんでした。しかし安い双眼鏡では遠くのもの判別できず、結局は本格的に野鳥専門の道具とカメラを購入するという羽目に陥りました。ところが道具が良いとさらに様々な鳥の発見となり、もったいないので観察記録を付け始めるとそれがさらにエスカレートし、暇を作っては毎日のように観察に出かけるようになりました。知れば知るほど長流川の魅力に惹き付けられました。

観察記録を付け始めて7年ほどになりますが、5年間は



毎日が発見の連続でした。自然が破壊された所として馬鹿にしていた長流川がウトナイ湖に出かけなくても殆どの鳥を見ることができる特異なところなんだと言うことが次第に明らかになってきました。そのことが分かるにつれて河口周辺だけでなく上流部の調査、海岸、海の調査など伊達市の全体の野鳥調査まで手を伸ばしてきました。これまでの野鳥観察の中で長流川が地域の生態系の中核となっていることが分かりました。海と山を結ぶ回廊としての役割、わずかに残された河畔林と周辺の田畑が、生き物たちの残された生息場所として、地域生態系を形成しています。さらには鳥の渡りの中継地としての地理的条件、採食条件がある程度満たされる為か、さまざまな旅鳥が河口周辺に立ち寄り羽根を休め、餌とりをして行きます。夏は夏鳥の繁殖地として、冬は冬鳥の越冬地として、多くの鳥たちを育んでいます。

3) 長流川の野鳥たち

私がこれまで記録したものと一部日本野鳥の会の記録から作成した伊達の野鳥リストを表1に示しています。

4) 長流川の野鳥の特徴

ご存知のように伊達は活火山である有珠山の裾野に広がる町です。洞爺湖カルデラ形成時の火山灰や有珠山の火山灰が堆積し長流川の東斜面に20m~50mの火山灰の崖が形成されています。この斜面は土砂流出を防ぐ為一体が保安林となっており長流川の自然度を維持する大切な役割を果たしています。河口近くから6kmほど続くこの崖の斜面は長流川の自然の多様性を作り出し、そこに生息する生物の多様性、種の多様性を生み出しています。野鳥については山野の鳥から、水辺の鳥さらに海鳥まで長流川周辺で北海



ハジロコチドリ 2002年10月

道で見られる殆どの鳥を見ることができます。河口部分の自然破壊が著しい為、かつては鳥の数も多かったと聞きますが、現在は残念ながら数的に多くの鳥を呼び寄せる環境にはありません。しかし鳥の渡りの地理的条件がよいのか(シギ・チドリ類とカモ類の出現の中身からサハリンルートと千島ルートが重なっているようです)、迷鳥と呼ばれる珍しい鳥が時々現れたりして、長流川は狭い範囲の中で様々な種類の鳥を見ることができる特異なところといっているのかもしれませんが。

「野鳥だより」120号(平成12年6月20日発行)で報告しましたオオカラモズ(99年末)をはじめとして、オオホシハジロ(97年、98年越冬、99年越冬、01年)、カラシラサギ(99年、01年)、ツクシガモ(98年)、アメリカヒドリ(98年)、ツバメチドリ(98年)、トウゾクカモメ(01年)、クロトウゾクカモメ(02年)、コベニヒワ(97年)、マミジロツメナガセキレイ(ツメナガセキレイの1亜種、99年)、セイトカシギ(98年、01年、02年)、ミヤコドリ(01年)、ハジロコチドリ(02年)、そして今年、なんとヒメハジロが3月15日から4月26日まで長期滞在しました。ヒメハジロは越冬していたミコアイサと並ぶと、もう一回り小さな鳥で、河口のプールで1日中盛んにもぐって餌採りをしていました。なかなか警戒心が強く、50mより近くには近づくことができないほどでした。ホオジロガモが20羽ほど増えた時期に一致しているので、どこからか一緒に渡ってきたものと思われます。長流川が自分の居場所のように、当たり前顔をしてホオジロガモの近くで毎日暮らしていました。休むときは背中にくちばしを突っ込んで、ミコアイサのそばにいることも多く、近い仲間とでも思っていたのでしょうか。いつ旅立つかと毎日観察を続けていましたが、4月26日午前10時、約20羽のホオジロガモの群れと太平



ヒメハジロ♀ 2003年3月

洋を北上して行きました。

もう一つの特徴といえるのは新聞にも載りましたが、4年前からのマガンの越冬です。以前から春・秋の渡りの時期に立ち寄ることがありましたが、99年3羽から始まったマガンの越冬(11月～3月)は00年5羽、01年19羽(+オオヒシクイ2羽)、02年59羽と急速にその数を増しています。今後の動きが注目される所です(4月3日に総てのマガンが北上しました)。

5) 伊達の野鳥の観察ポイント

<長流川河口>

国道37号線を虻田町方向へ進み長流橋を渡ってすぐの信号を左折し、踏み切りを渡り100mほど直進すると左手に長流川の堰堤に入る道があります。そこを左折して堤防の管理道路を河口に向かって(右折して)真直ぐ進むと河口に出ます。

春・秋(4～5月、8～10月)：数はあまり多くはありませんがシギ・チドリ類を一通り見ることができます。(釣り人も多く鳥が逃げってしまうことが多い)。

夏(6～8月)：カモメ類、ミサゴ、ハヤブサ、ノビタキ、コヨシキリ、オオヨシキリ、コチドリ、ヒバリ、オオジュリン、アオジ、カワセミ、アオサギ、シギ・チドリ類。

冬(11～3月)：オオハクチョウ、ハシジロアビ、オオハム、ホオジロガモ、スズガモ、ホシハジロ、ミコアイサ、カルガモ、マガモ、クロガモ、ビロードキンクロ、コオリガモ、アカエリカイツブリ、コクガン、マガン、オジロワシ、ノスリ、ケアシノスリ、ミヤマガラス、コクマルガラス、カモメ類など。



コクガン 2001年3月

<有珠アルトリ岬～海水浴場>

国道37号線を虻田町方向へ長和町を通り過ぎて長流川の河岸段丘の坂を登り若生(ワッカオイ)を過ぎると下り坂

となる(通称メロン街道)。坂を下ってすぐ左に海岸へ出る道があるのでそれを左折して海岸(アルトリ海岸：通称恋人海岸)に出ると正面に見えるのがアルトリ岬です。

春・秋(4～5月、8～10月)：シギ・チドリ類。アルトリ岬では10月渡りのピークには朝沢山の野鳥が頭上を飛び交うのを見ることができます。

夏(6～8月)：カモメ類、ノビタキ、オオジュリン、コヨシキリ、オオヨシキリ、ヒバリ、アオジ、ウグイス、ショウドウツバメ(営巣)。

冬(11～3月)：コクガン、クロガモ、ビロードキンクロ、ハジロカイツブリ、ホオジロガモ、コオリガモ、カモメ類、(ゴマフアザラシ)。

6) 最後に長流川の自然のあるべき方向

これまで伊達市においても自分たちの住む地域の自然状況を把握して街づくりをすることはありませんでした。伊達市では他の地域に先駆けて環境基本条例を制定しましたが(平成10年)それが街づくりの中心にすえられ実行されているかという、まだまだ発展途上と言わざるを得ません。子供の宿題から始まった伊達の野鳥調査は私にとって伊達市の自然の再認識となりました。鳥たちにとって重要な伊達の自然は、地域の環境を維持する為にも、鳥たちによってリンクされた地球生態系を守っていく上でも大事なことになるということが分かりました。まず何をしなければならぬのか。伊達において唯一残された長流川周辺を地域生態系のコアとして保全していくことを、早急に求めていかなければならないと思います。これから21世紀の持続的な地域社会の展望は地域生態系との共生の中で、食の

安全を求めていく第一次産業の確立を目指すことによって切り開かれるものと思います。グローバル化の波が押し寄せてきている中で農業を中心とした第一次産業が破壊されようとしています。地域社会を守るのは地域社会の経済的自立、食の確保からだと思います。それを保障するのが地域を取り巻く豊かな自然であるということです。資本主義経済はどうしても目先利潤追求をせざるを得ません。しかし先を見通して長いスパンで地域社会の構築を迫しなければならない時代に入っていると思います。鳥たちによって地域の自然を見せられ、地域社会のあり方、さらには人間社会のあり方を考えさせられました。

バードウォッチングは楽しいながらも深いものだと思います。

〒052-0021 伊達市末永町9738

表1 伊達の野鳥リスト (2003年4月現在まで)

アビ目	ミコアイサ	タカブシギ	ヤツガシラ科	キクイタダキ
アビ科	ウミアイサ	キアシシギ	ヤツガシラ	ヒタキ科
アビ	カワアイサ	イソシギ	キツツキ目	キビタキ
オオハム	タカ目	ソリハシシギ	キツツキ科	ムギマキ
シロエリオオハム	タカ科	オグロシギ	アリスイ	オオルリ
ハシジロアビ	ミサゴ	オオソリハシシギ	ヤマゲラ	コサメビタキ
カイツブリ目	ハチクマ	ホウロクシギ	クマゲラ	エナガ科
カイツブリ科	トビ	チュウシャクシギ	アカゲラ	エナガ
カイツブリ	オジロワシ	ヤマシギ	オオアカゲラ	シジュウカラ科
ハジロカイツブリ	オオワシ	オオジシギ	コアカゲラ	ハシブトガラ
ミミカイツブリ	オオタカ	アオシギ	コゲラ	コガラ
アカエリカイツブリ	ツミ	セイタカシギ科	スズメ目	ヒガラ
カンムリカイツブリ	ハイタカ	セイタカシギ	ヒバリ科	ヤマガラ
ミズナギドリ目	ケアシノスリ	ヒレアシシギ科	ヒバリ	シジュウカラ
ミズナギドリ科	ノスリ	アカエリヒレアシシギ	ツバメ科	ゴジュウカラ科
ハシボソミズナギドリ	ハイイロチュウヒ	ツバメチドリ科	ショウドウツバメ	ゴジュウカラ
ペリカン目	チュウヒ	ツバメチドリ	ツバメ	キバシリ科
ウ科	ハヤブサ科	トウゾクカモメ科	イワツバメ	キバシリ
カワウ	ハヤブサ	トウゾクカモメ	セキレイ科	メジロ科
ウミウ	チゴハヤブサ	クロトウゾクカモメ	ツメナガセキレイ	メジロ
ヒメウ	コチョウゲンボウ	カモメ科	キセキレイ	ホオジロ科
コウノトリ目	チョウゲンボウ	ユリカモメ	ハクセキレイ	シラガホオジロ
サギ科	キジ目	セグロカモメ	セグロセキレイ	ホオジロ
ゴイサギ	ライチョウ科	オオセグロカモメ	ピンズイ	ホオアカ
アマサギ	エゾライチョウ	ワシカモメ	タヒバリ	カシラダカ
ダイサギ	キジ科	シロカモメ	ヒヨドリ科	ミヤマホオジロ
チュウサギ	キジ	カモメ	ヒヨドリ	アオジ
コサギ	ツル目	ウミネコ	モズ科	クロジ
カラシラサギ	クイナ科	ミツユビカモメ	モズ	オオジュリン
アオサギ	クイナ	アジサシ	アカモズ	ツメナガホオジロ
カモ目	バン	ウミスズメ科	オオモズ	ユキホオジロ
カモ科	オオバン	ハシブトウミガラス	オオカラモズ	アトリ科
コクガン	チドリ目	ウミスズメ	レンジャク科	アトリ
マガン	ミヤコドリ科	エトロフウミスズメ	キレンジャク	カワラヒワ
ヒシクイ	ミヤコドリ	ハト目	ヒレンジャク	マヒワ
コブハクチョウ	チドリ科	ハト科	カワガラス科	ベニヒワ
オオハクチョウ	ハジロコチドリ	キジバト	カワガラス	コベニヒワ
コハクチョウ	コチドリ	アオバト	ミソサザイ科	ハギマシコ
ツクシガモ	イカルチドリ	カッコウ目	ミソサザイ	オオマシコ
オシドリ	シロチドリ	カッコウ科	イワヒバリ科	イスカ
マガモ	メダイチドリ	ジュウイチ	カヤクグリ	ナキイスカ
カルガモ	ムナグロ	カッコウ	ツグミ科	ベニマシコ
コガモ	ダイゼン	ツツドリ	コマドリ	ウソ
トモエガモ	タゲリ	ホトトギス	ノゴマ	イカル
ヨシガモ	シギ科	フクロウ目	コルリ	シメ
オカヨシガモ	キョウジョシギ	フクロウ科	ルリビタキ	ハタオリドリ科
ヒドリガモ	トウネン	コミミズク	ジョウビタキ	ニューナイスズメ
アメリカヒドリ	ヒバリシギ	コノハズク	ノビタキ	スズメ
オナガガモ	オジロトウネン	オオコノハズク	イソヒヨドリ	ムクドリ科
シマアジ	ウズラシギ	フクロウ	トラツグミ	コムクドリ
ハシビロガモ	ハマシギ	ヨタカ目	クロツグミ	ムクドリ
ホシハジロ	サルハマシギ	ヨタカ科	アカハラ	カラス科
オオホシハジロ	オバシギ	ヨタカ	ツグミ	カケス
キンクロハジロ	ミユビシギ	アマツバメ目	ウグイス科	コクマルガラス
スズガモ	ヘラシギ	アマツバメ科	ヤブサメ	ミヤマガラス
クログモ	エリマキシギ	アマツバメ	ウグイス	ハシボソガラス
ビロードキンクロ	キリアイ	ブッポウソウ目	エゾセンニュウ	ハシブトガラス
シノリガモ	ツルシギ	カワセミ科	コヨシキリ	233種
コオリガモ	コアオアシシギ	ヤマセミ	オオヨシキリ	長流川周辺で確認され
ホオジロガモ	アオアシシギ	アカショウビン	メボソムシクイ	たものは219種
ヒメハジロ	クサシギ	カワセミ	センダイムシクイ	

鳥獣保護法の改正について

探鳥幹事代表 岡田 幹夫

鳥たちの観察を楽しみにしている私たちにとって、より多くの鳥たちが見られることは大きな喜びだと思います。しかし、最近、渡り鳥の種類も数も少なくなってきたことは寂しい限りであり、探鳥会報告でも明らかになってきています。そのような時期にあって、「鳥獣保護法の改正」とか、「やっと保護法アザラシ調査」という記事を見た方も多いのではないかと思います。鳥獣たちの生息環境の保全対策や保護規制がより充実されるのではないかと期待をもっている方も多いと思われるので、その内容を紹介してみたいと思います。

(1) 鳥獣保護法という法律はあるのでしょうか

「鳥獣保護法」という名称の法律はありません。現行の「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」を「鳥獣保護及び狩猟の適正化に関する法律」に改正するという法律案が昨年7月に成立しています。これを略して、「鳥獣保護法の改正」、「狩猟法違反」と呼ばれたり記事になったりしています。この法律は、本年4月に施行されました。

(2) 法律の改正内容はどのようなものでしょうか

今回の改正内容の概要は次のとおりです。

- ① 条文をひらがな書き、口語体化したこと。
- ② 狩猟免許に係る障害者の欠格条項の見直しをしたこと。
- ③ 水辺域における鉛製散弾の使用を制限することとしたこと。
- ④ その他、山野への捕獲鳥獣の放置の禁止、鳥獣捕獲数等の報告の義務付け、違法捕獲鳥獣の飼養の禁止などされたこと。

改正内容のうち、表記がカタカナ書き、口語体化の条文は民法や商法の条文などに見られますが、今回、ひらがな書き、口語体化に全面的に改められて読み易くなりました。しかし、法律の条文だけでなく、政令等で定められる同法の施行令及び施行規則を見なければ保護規制の内容がよく理解できないのも事実です。鉛製散弾の使用については、渡り鳥が鉛粒の摂取による鉛中毒として問題となっていた行為ですから、その効果が期待されます。その他の内容も懸案とされていた事項ですから当然の改正と考えられます。

(3) 狩猟の適正化とはどのようなことをいうのでしょうか

通称、「鳥獣保護法」というイメージからは、鳥獣保護だけの法律と見られかねませんが、この法律は、狩猟の規制、狩猟以外の目的での鳥獣の捕獲或いは鳥獣の飼養など

数多くの内容をもった法律となっています。「狩猟の適正化」も、狩猟と鳥獣の保護や人間生活などの多くの環境要素との関連性から出てきた表現と考えられます。

この法律の沿革をたどってみますと、明治28年に制定の「狩猟法」にたどり着きます。それ以前には狩猟規則などで規制されていたようです。この法律が数回の改正を経て昭和38年に「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」に改正されています。昭和25年に鳥獣保護区制度の創設されていますが、38年には多くの「禁猟区」（狩猟禁止の区域）が「鳥獣保護区」に改められたとか、鳥獣保護の思想を法律に反映させた改正もされてきています。このように「狩猟法」から発展してきた法律ですから、狩猟の規制内容などが多く盛り込まれた法律となっているのです。

(4) 鳥獣等の用語定義はどのようになっているのでしょうか

用語の定義などについて、保護に関係するものを紹介してみます。

- ① 鳥獣とは、鳥類又は哺乳類に属する野生動物をいう。
- ② 狩猟鳥獣とは、その肉又毛皮を利用する目的、生活環境、農林水産業又は生態系に係る被害を防止する目的、その他の目的で捕獲等の対象となる鳥獣（鳥類のひなを除く）であって、その捕獲がその生息の状況に著しく影響を及ぼすおそれのないものとして定められたものをいう。
- ③ 鳥獣保護区とは、鳥獣の種類その他鳥獣の生息状況を勘案して保護を図るため特に必要と認めて指定する区域をいう。なお、国際的又は全国的な鳥獣の保護の見地から保護のため重要と認める区域は環境大臣が指定することになっています。
- ④ 特別保護地区とは、鳥獣保護区の区域内で鳥獣の保護又は鳥獣の生息地の保護を図るため特に必要があると認めて指定する区域をいう。
- ⑤ 特定鳥獣とは、その数が著しく増加又は減少している鳥獣をいう。また、特定鳥獣保護管理計画とは、これら鳥獣を長期的な観点から保護を図るための計画をいう。

(5) 新たに保護の対象となった鳥獣にはどのようなものがあるのでしょうか

新たに保護対象となった鳥獣は、哺乳類のうち、（とがりねずみ科）トウキョウトガリネズミほか1種、（もぐら科）センカクモグラほか1種、（あしか科）ニホンアシカ、

(あざらし科)ゼニガタアザラシほか4種、(じゅごん科)ジュゴン、(ねずみ科)セスジネズミほか3種が該当します。

(6) 表記が改められた鳥獣があるのでしょうか

鳥獣名は、すべてカタカナで表記され、さらに鳥獣名の後に括弧書きで学名を表記されることになりました。例えば、マガモ(アナス・プラテリユンコス)、ヒヨドリ(ヒプスイペテス・アマウロティス)となる。また、狩猟鳥獣のうち、従来ノウサギと表記されていた道内に生息するユキウサギは、本州以南に生息するノウサギ(レプス・ブラキユウルス)の表記とは区分されてユキウサギ(レプス・ティミドゥス)と、エゾシカはニホンジカ(ケルヴス・ニボン)と表記されます。過去に道内に放鳥されて生息しているコウライキジはキジ(ファスィアヌス・コロキクス)と表記されます。

(7) 鳥獣保護区や特別保護地区における規制はどのようなになっているのでしょうか

鳥獣保護区では狩猟が禁止されています。また、所有者は営巣・給水・給餌などの施設の整備を拒むことができないことになっています。特別保護地区では次の行為が規制されています。

- ① 建築物その他の工作物を新築、改築又は増築すること。
- ② 水面を埋め立て又は干拓すること。
- ③ 木竹を伐採すること。
- ④ 鳥獣の保護に影響を及ぼすおそれがある行為として政令で定めるものを行うこと。政令で定めるものとしては、次の行為が規制されます。
 - ア. 植物を採取し若しくは損傷し、落葉若しくは落枝を採取し、動物を捕獲し若しくは殺傷し、又は動物の卵を採取し若しくは損傷すること。
 - イ. 撮影、録画若しくは録音をし、又は鳥獣の営巣に影響を及ぼすおそれがある方法として環境大臣が定める方法により動植物を観察すること。
 - ウ. (その他省略)

以上が、鳥獣保護及び狩猟の適正化に関する法律と同法施行令、施行規制の改正内容の主なもの並びに保護等に関する内容です。

概観してみれば、法律の基本的な内容はあまり変わっていませんが、従来からの鳥獣の保護対策を踏襲する中で、新たな保護対象の対策が展開されていくものと考えられます。

〒004-0002 札幌市厚別区厚別東2条5丁目3-5

平成15年度 総 会 報 告

日 時：平成15年4月12日(土) 午後6時～7時

場 所：札幌市民会館 第7会議室

小堀煌治会長の挨拶のあと、議長に戸津高保氏を選出し、議案審議が行われ、原案どおり可決、承認された。

〈議 事〉

1. 平成14年度事業報告

[総 務]

- (1) 野鳥写真展の開催
開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー
開催期間：平成14年5月8日(火)～27日(月)
出 展：14名、29点
- (2) 「野鳥だより」の発送(128号～131号)
- (3) 新年野鳥講演会、スライド映写会の開催
講 師：川崎慎二氏「根室地方の自然と野鳥」
平成15年1月11日(土)、札幌女性センター
参 加 者：54名(スライド提供者 5名)
- (4) 愛護会名入りカレンダーの作成・販売(70部)
- (5) 定例幹事会の開催(各月1回、計12回)
- (6) 傷害保険の更新

[広 報]

- (1) 「野鳥だより」128号～131号の発行
- (2) 愛護会ホームページの維持運営

[探 鳥]

- (1) 探鳥会21回。参加者累計716名。(1回平均 34名)
- (2) 「野幌森林公園を歩きましょう」開催7回。

[会 計]

- (1) 平成14年度決算報告
- (2) 平成14年度会計監査報告。大野信明監事から適正に処理されている旨の報告があった。

2. 平成15年度事業計画

[総 務]

- (1) 野鳥写真展の開催
開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー
開催期間：平成15年5月7日(木)～20日(火)
- (2) 「野鳥だより」の発送(132号～135号)
- (3) 新年野鳥講演会、スライド映写会の開催
平成16年1月予定
- (4) 愛護会名入りカレンダーの作成・販売(70部)
- (5) 定例幹事会の開催(各月1回、計12回)
- (6) 傷害保険の更新

[広 報]

- (1) 「野鳥だより」132号～135号の発行
- (2) 野鳥愛護会ホームページの維持運営

[探 鳥]

- (1) 探鳥会 27回(大沼方面一泊探鳥会を含む)

[役員人事]

三船幸子氏(総務)、梶浦孝純氏、浪田良三氏、野坂英三氏、長谷川富昭氏(以上探鳥)の退任、島田芳郎氏(総務)の新任が承認された。

[平成15年度役員] (敬称略)

顧問 谷口 一芳、藤巻 裕蔵
 会長 小堀 煌治
 副会長 戸津 高保、井上 公雄
 監事 大野 信明、村野 紀雄
 会計幹事 蒲澤鉄太郎、清水 朋子
 代表幹事 白澤 昌彦
 幹事

(広報) ◎ 樋口 孝城、岩崎 孝博(兼)、北山 政人
 武沢 和義、佐藤ひろみ、白澤 昌彦(兼)
 戸津 高保(兼)、高橋 良直、道場 優
 道川富美子、山下 茂
 (◎印各担当の代表者)

(総務) ◎ 中正 憲佑、岩崎 孝博、大町 欽子
 栗林 宏三、蒲澤鉄太郎(兼)、佐藤ひろみ(兼)
 村田 静穂、松原 寛直、島田 芳郎
 (探鳥) ◎ 岡田 幹夫、井上 公雄(兼)、梅木 賢俊
 後藤 義民、栗林 宏三(兼)、佐藤 幸典
 竹内 強、田子 元樹、富川 徹
 成澤 里美、早坂 泰夫、渡辺 俊夫
 渡辺紀久雄

会員数

	11. 4. 1	12. 4. 1	13. 4. 1	14. 4. 1	15. 4. 1
個人	330	325	324	339	346
家族	33	31	42	46	42
団体	2	2	2	2	2
	(396)	(387)	(408)	(431)	(430)

注：() は個人会員数 + (家族会員数 × 2)

平成14年度 決算書

(収入の部)

項目	予算	決算	増減	備考
繰越金	460,054	460,054	0	
個人会費	700,00	653,500	▲ 46,500	入金23名減
家族会費	126,000	150,000	24,000	入金8家族増
団体会費	10,000	10,000	0	
参加費	30,000	27,000	▲ 3,000	新年講演会参加者54名
売上金	130,000	135,890	5,890	野鳥だより、カレンダー他
雑収入	3,946	60	▲ 3,886	
合計	1,460,000	1,436,504	▲ 23,496	

(支出の部)

項目	予算	決算	増減	備考
印刷費	650,000	604,560	▲ 45,440	
通信費	200,000	209,090	9,090	野鳥だより郵送費増
会議費	35,000	31,400	▲ 3,600	
消耗品費	50,000	98,248	48,248	野鳥だより発送封筒作成
交通費	20,000	19,000	▲ 1,000	野鳥だより発送業務
報償費	92,000	92,000	0	事務所費用、講師謝礼
雑費	70,000	70,003	3	写真展、傷害保険など
予備費	343,000	0	▲ 343,000	
合計	1,460,000	1,124,301	▲ 335,699	

1,436,504 (収入) - 1,124,301 (支出) = 312,203 (次年度へ繰越)

平成15年度 予算書

(収入の部)

項目	本年度予算	前年度予算	増減	備考
繰越金	312,203	460,054	▲ 147,851	
個人会費	670,000	700,000	▲ 30,000	335名 × 2,000
家族会員	120,000	126,000	▲ 6,000	40家族 × 3,000
団体会費	10,000	10,000	0	2団体 × 5,000
参加費	30,000	30,000	0	新年講演会 60名 × 500
売上金	134,000	130,000	4,000	野鳥だより、カレンダーほか
雑収入	3,797	3,946	▲ 149	
合計	1,280,000	1,460,000	▲ 180,000	

(支出の部)

項目	本年度予算	前年度予算	増減	備考
印刷費	620,000	650,000	▲ 30,000	前年度実績を考慮
通信費	210,000	200,000	10,000	前年度実績を考慮
会議費	35,000	35,000	0	
消耗品費	50,000	50,000	0	
交通費	16,000	20,000	▲ 4,000	発送業務人員削減
報償費	92,000	92,000	0	事務所費用、講師謝礼
雑費	70,000	70,000	0	写真展、傷害保険など
予備費	187,000	343,000	▲ 156,000	
合計	1,280,000	1,460,000	▲ 180,000	

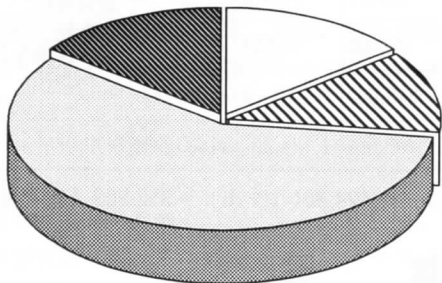
北広島市若葉町周辺を利用する野鳥について

先 崎 啓 究

はじめに

北広島市内とその周辺では、1998年から2002年までに204種類の鳥類が観察・記録されている。その中で自宅がある市内若葉町周辺では、123種類の鳥類が観察されている。若葉町内は、大きな森林はないものの、住宅などに隣接する緑の面積が広く、鳥類にとって休息する場所がいたるところにあるといえる。またこのような環境は、観察する人間にとっても鳥を見つけやすいため、これだけの種類の鳥類が観察できたのだと思われる。観察の方法としては、普段の生活の中で何気なく見られたものや、定点調査、パードウオッチングなどで公園などに出かけて観察したことなど、特に決めてはいない。

図1は98～02年にかけて若葉町で確認されたことのある鳥類123種類を夏鳥、冬鳥、旅鳥・迷鳥、留鳥別に表したものである。このうちここに書かれている旅鳥とは、全国を通過して行く旅鳥のほかに北海道全体では夏鳥、冬鳥にあたるが、若葉町では春と秋の両時期に通過するのみであるために、旅鳥の中に含めた。また旅鳥と同様に留鳥の一部(漂鳥)もここでは旅鳥とした。



□ 夏鳥 (18種) ▨ 冬鳥 (15種)
 ▩ 留鳥 (18種) □ 旅鳥・迷鳥 (72種)

図1. 若葉町で確認されたことのある野鳥(123種)の夏鳥、冬鳥、旅鳥・迷鳥、留鳥の内訳と割合

1. 若葉町に渡来する野鳥について

若葉町内に夏鳥として渡来する種類はチゴハヤブサ、コムドリ、アカハラ、キビタキなど18種類で、繁殖が確認されているものがほとんどである。また冬鳥は15種類が確認されていて、山地から降りてくるヤマゲラやカケスをはじめロシアなどの北から渡ってくるアトリ、ツグミといった小鳥類、またその小鳥類を狙ってハイタカなどの猛禽類の渡来が確認された。留鳥はカラ類やカラス類、キツツキ類など18種類が生息していて、夏鳥同様繁殖しているものがほとんどであった。旅鳥は全体の約60%を占める72種類

で最も多く、若葉町のみならず北広島市で観察した鳥類相の特徴とも言える。

2. 旅鳥について

北広島市で旅鳥が多く観察されることについては、北広島市の上空が渡り鳥の通過コースになっているためと考えられる。若葉町上空では春秋の両時期に、オオハクチョウ、コハクチョウ、マガン、ヒシクイ、カワウ、オオセグロカモメ、ウミネコなど普段北広島ではあまり生息していない水鳥が上空を通過していく姿が見られる。特にガン・ハクチョウ類の渡りは夜間や早朝に行われる傾向が強く、声のみの記録が多かった。シギ・チドリも夜間の通過が多く、地鳴きのみでの識別となってしまったが、周辺での観察記録も含めて考えてみると、実際はもっと多くの個体が渡っているのかもしれない。少数ながらカモメ類の移動も目視によって確認することができ、内陸を通過して渡りを行っているということは大変興味深く感じる。また小鳥の渡りも例外ではなく、ノゴマやシマセンニュウ、シロハラ、マミチャジナイなど、この近辺で繁殖しない種類が多く観察されている。

他には、春と秋の両季の夜間に小鳥の群が上空を通過していることを地鳴きの聞き取りのよって確認することができた。地鳴きの多くはツグミ類の「ゾー」という声だったが、その他に、カラ類やホオジロ類などの地鳴きも確認することができた。特徴のある声は識別することができ、アトリ、マヒワ、ピンズイ、タヒバリ、ツグミなど少なくとも20種類以上の小鳥類が渡っていることがわかった。秋季にこれだけの地鳴きが聞かれるのは、その年に生まれた幼鳥が多く混ざっているためと考えられる。

この他、特に春季に少数ながら猛禽類の渡りも観察することができた。特に晴れた日には少ないながらもノスリやオオタカが北へ渡って行く姿が観察された。

3. 若葉町において渡来が珍しいと思われる野鳥の記録

北広島市において、飛来が比較的珍しいと思われる野鳥の観察記録を紹介したいと思う。

ゴイサギ 1998年10月4日

早朝、自宅近くの南町公園にて幼鳥1羽を観察した。発見したときは十数羽のハシブトガラスに追いかけていて、公園内の木の上に避難してきたところを確

認した。その後5分ほどして南へ飛び去った。

コミミズク 2000年12月19日

午後10時4分に自宅と隣家の間を飛翔して行くのを目視で確認した。当時は雪が薄く積もっていたため、あたりは明るく、コミミズクと識別できた。強風によって迷行してきたものと思われる。

ギンザンマシコ 2001年2月8日

早朝、雌もしくは若鳥と思われる個体が1羽公園を通過していくのが観察された。

オジロビタキ 2001年11月21、22日

午後2時30分頃に自宅の庭にて1羽を発見・撮影した。観察した個体は、第1回冬羽で暗いところよりもやや明るく開けたところが好きなようであった。また、窓ガラスに映った自分の影と戦うなど、習性は他のヒタキ類に似ていた。22日の朝以降は観察できなかつたため、飛去したものと思われる。

トラフズク 2002年9月9日

午前4時56分、4羽が南西方向に渡っていくのを観察した。毎日早朝に観察を行っているわけではないので迷鳥なのか定期的に渡っているのかは定かでないが、多くの鳥類が上空を通過しているため、トラフズクも北広島上空を渡りのルートとしていてもおかしくはない。

この他、希な冬鳥として2001年2月にオオマシコ、ウソ亜種アカウソ、シロハラ、トラツグミなどが近所にて確認された。この年は寒波と暖冬が重なったためいろいろな種類が越冬したと考えられる。

4. 庭を訪れる野鳥について

若葉町全体では123種類の野鳥が観察されているが、そのうち庭に飛来したことのある種類は50種類にも上る。この50種類のうち半数くらいは庭に設置してあるバードテーブルの影響と思われるが、残りの種類は旅の途中にただ単に立ち寄ったものと考えられる。

図2に各季節に庭を訪れた野鳥の種類数を示しているが、この図から庭を訪れる野鳥は、秋から春にかけて多く、夏

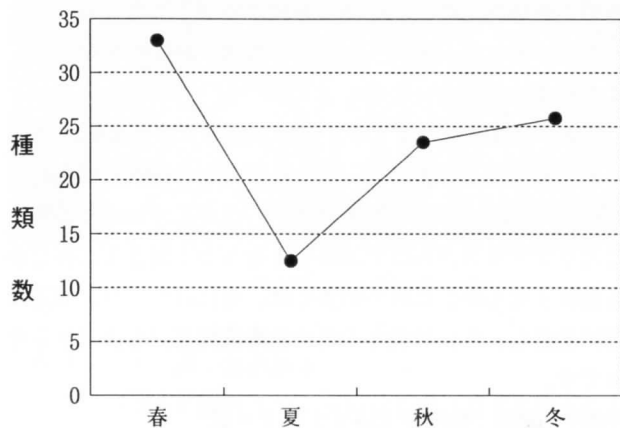


図2. 春夏秋冬に庭を訪れた野鳥の種類数

表1 庭を訪れた野鳥

種名	2000~2001年					
	月					
	12	1	2	3	4	5
ハイタカ	○	○	○	○	○	
アカゲラ	○	○	○	○	○	○
ヤマゲラ	○	○	○	○	○	
ヒヨドリ	○	○	○	○	○	○
モズ	○	○	○	○		
キレンジャク						○
ヒレンジャク						○
シロハラ			○			
ツグミ	○	○	○	○		
ハシブトガラ	○	○	○	○	○	○
ヒガラ	○	○	○	○	○	○
ヤマガラ	○	○	○	○	○	○
シジュウカラ	○	○	○	○	○	○
メジロ						○
アトリ			○	○	○	
カワラヒワ				○	○	○
シメ	○	○	○	○	○	○
ニューナイスズメ						○
スズメ	○	○	○	○	○	○
ムクドリ			○	○		
コムクドリ						○
ハシブトガラス	○	○	○	○	○	○
ハシボソガラス	○	○	○	○	○	○

種名	2001年~2002年						
	月						
	11	12	1	2	3	4	5
ハイタカ		○	○	○	○	○	
コゲラ		○					
アカゲラ		○	○	○	○	○	
ヤマガラ							
ヒヨドリ	○	○	○	○	○	○	○
キレンジャク		○			○		
ヒレンジャク					○		
ツグミ		○	○	○	○		
オジロビタキ	○						
ルリビタキ							○
ウグイス							○
エゾムシクイ							○
ハシブトガラ	○	○	○	○	○	○	○
ヒガラ	○	○	○	○	○	○	○
ヤマガラ	○	○	○	○	○	○	○
シジュウカラ	○	○	○	○	○	○	○
ゴジュウカラ	○	○	○	○	○	○	
メジロ							○
カワラヒワ	○					○	○
シメ	○	○	○	○	○	○	○
ニューナイスズメ							
スズメ	○	○	○	○	○	○	○
ムクドリ		○	○	○	○	○	
コムクドリ							○
カケス	○	○	○	○	○	○	
ハシブトガラス		○	○	○	○	○	○
ハシボソガラス	○	○	○	○	○	○	○

の渡来が最も少ないことがわかる。夏場はバードテーブルに餌を置いていないため、池に水浴びをしに来る個体が主であった。また秋にはコヨシキリやノゴマなどの旅鳥が池で水浴びをしている姿が確認された。

冬から春にかけては、渡りの時期と餌が一番とりにくく



ハイタカ 筆者撮影

なる時期が重なるために、庭への飛来数が増えたものと考えられる。この他、鳥類ではないが、ドブネズミが2000年から2001年にかけての冬場、庭にいつき、ひまわりの種を食べている姿が何度か観察された。

表1には00~02年の秋季~春季に庭を訪れた野鳥がで示されている。

5. ま と め

以上のことなどから、若葉町周辺や自宅庭などは多くの野鳥に利用されているということがわかった。これも市内に自然環境が多く残っているためと考えられる。この先も環境保全ができていれば、より多くの野鳥が観察されることが予想される。しかし、周囲の環境は、空き地の住宅開発や林道のコンクリート化など、年々悪化している模様で、野鳥など野生生物全体の観察種類が減ってきているような気がする。また、公園内のササや苗木などの刈り取りによって、アオジ、ウグイス、ルリビタキ、センニュウ類などの種類は身を隠すところがなくなり、ほとんど渡来しなくなってしまった。これについては、ササや下草が回復した時の動向が気になるが、前ほどの野鳥が観察されるのか気になるところだ。今後も観察を続けていきたいと思う。

〒061-1142 北広島市若葉町3-4-1



野幌森林公園探鳥会

2003. 2. 2

森 拓 通

私は学生時代に船に乗る機会が多かったことと、海鳥を研究対象としていた方が周囲にいたため、海鳥と接する機会が多かった。そのため、海鳥に対する知識は多少ともあったが、陸鳥は全く分からない。昨年3月に大学を卒業し、新たな趣味を持つと考えたとき、陸鳥に対する知識の少なさを埋めたいと考え、登山やカヌーをしながら、バードウォッチングをはじめた。「フィールドガイド日本の野鳥」を片手に、休日に山川問わず歩き漕ぎ、ある程度の鳥類の識別は出来るようになったものの、野鳥に対する知識をもっと深めたいと思った。そこで、江別での研修の滞在期間を利用し、今回初めて探鳥会に参加させて頂いた。

集合場所に到着すると、早速、参加者の方々が木の一点を見つめている。何がいるのかと思えば・・・何と、フクロウであった。人生初めての野生のフクロウとの出会い、まさか、こんなところにようとは・・・少々あっけに

とられてしまった。フクロウは無防備にも木の穴から半分以上体を出し、眠っている様子であった。さすがに森の王者。林の中を進んでいくと、稚内の山中でもよく見かけるカラ類のほか、私が今まで見たことのないヤマゲラ、オオアカゲラ、ウソなどが確認できた。

野鳥観察を本格的にはじめるようになってからまだ日が浅いが、野鳥観察はとても面白いと思う。私にとって野鳥観察の最大の魅力は、多種多様な鳥たちの営みを、身近な場所でも手軽に観察できることに尽きる。いずれは、野鳥観察の腕を磨き、その楽しさを伝える側になれば、と思う。

最後になりましたが、今回の探鳥会を計画・運営された幹事の皆様、このような機会を設けて頂き本当にありがとうございました。また、参加者の皆様、お疲れさまでした。また探鳥会でお会いしましょう。

P.S 余談になりますが、先日、仕事で宗谷海峡の洋上に行く機会がありました。この時期の宗谷海峡には海鳥類がいないと思っていたら大間違い、なんと、「オロロン鳥」ことウミガラスだらけではありませんか！皆さんご存じかも知れませんが、これらの多くは、夏にはサハリン周辺などに生息し、冬には越冬のため北海道周辺にも南下するそうです。

〒097-0005 稚内市末広4丁目2-27

【記録された鳥】フクロウ、コゲラ、オオアカゲラ、アカ

ゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、キクイタダキ、ハシ
 ブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカ
 ラ、キバシリ、アトリ、マヒワ、ウソ、シメ、ハシボソガ
 ラス、ハシブトガラス 以上 19種

【参加者】岡田幹夫、後藤義民、小西扶美枝、佐々木泰夫、
 四垂義治、島田芳郎・陽子、道場 優、庄山紀久子、戸津
 高保・以知子、富川 徹・百合香、長尾由美子、広木朋子、
 辺見敦子、安 真一郎、山口和夫、山本昌子、横山加奈子、
 前田栄子、松島雅之、松原寛直・敏子、森 拓通

以上 25名

【担当幹事】富川 徹、松原寛直

初の探鳥会：円山公園

2003. 3. 2 村 井 章 夫

作春、北海道大学を定年退職した。かねて中学生時代の
 恩師の犬飼 弘先生から「鳥を見よう」との有り難いお誘
 いがあり、いずれと思っはいた。ところが退職後の後始
 末を含め雑用に追われて小1年が過ぎんとした去る2月末
 に突然先生からお電話があり、3月2日の円山公園行のご
 案内を頂いた。裏参道の借家に生まれ、大学生になるまで
 育った筆者にとって「庭先同然」のこの公園には特別の郷
 愁がある。ひんやりした曇天の朝、久し振りに公園に辿り
 着いた。やがてお見えの犬飼先生から皆さんにご紹介を頂
 き、午前9時に幹事の武沢和義先生のご先導で澄みわた
 園内をゆるやかに歩き始めた。24名の皆さんが木々の中
 に時折舞う小鳥の姿やさえずりに感動しておられる様子を
 拝見し、実に何十年の間「自然」から遠ざかっていたもの
 かと感じ入った。皆さんが歩き乍ら鳥の話題を自然に口
 にされるのには、正直とまどいを覚えた。やがて神社の境内
 に入った所で、フィーフィーと鳴く声が聞こえ、犬飼先生
 からウソという珍しい鳥だよと教えて頂いた。武沢先生の
 フィールドスコープから眺めたウソの頬からのどにかけて
 の紅色の実に美しい事。桜の新芽を啄み乍らなかなか動
 こうともしないウソの存在に、「これはもうけもの」との
 声が上がった。探鳥に素人の筆者にも大きな感動が伝わ
 った。本気になって双眼鏡で覗きまくった。8倍の視野に
 いったウソが目一杯に見えた。移動の途中から時折小雪が
 舞い降りて、動物園前からゆっくりと集合場所の公園管
 理事務所前に戻った。幹事の方から今日見る事の出来た鳥
 は18種類であるとご教示があり、何もわからに筆者には
 いささか驚きであった。午前10時40分解散後、犬飼先生、
 井上公雄さん方と5名で円山動物園に入り、童心に戻って
 時の流れを楽しんだ。帰りに先生から真木広造著の本「
 野鳥」を記念に贈られた。バードウォッチングの仕方は
 はじめ国内の287種の野鳥のエッセンスがまとめられ
 た冊子であり、大層嬉しかった。夕方帰宅後、横になっ
 て見入った。

筆者の半生と鳥は余りにご縁が無さ過ぎた。この日の
 会でのなごやかな皆さんの、鳥観察を通して自然を楽
 しまれる姿に感動した。筆者もこの齢になって仲間に加
 えて頂き乍ら、人生を歩むスピードを少し緩めてゆっ
 たりしようを痛感した。

〒001-0045 札幌市北区麻生町6丁目14-44

【記録された鳥】オオタカ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、
 ヒヨドリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカ
 ラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、アトリ、ウソ、シメ、スズ
 メ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上 18種

【参加者】赤沼礼子、板田孝弘、井上公雄、犬飼 弘、今
 泉秀吉、岡田幹夫、蒲澤鉄太郎、久志本アイ、品川睦生、
 鈴木英世、瀬賀勝人、高橋良直、武沢和義・佐知子、戸津
 高保、中正憲佑・弘子、長尾由美子、西村 芽、樋口孝城、
 松原寛直・敏子、三船幸子、村井章夫、安 真一郎、山田
 甚一、山本昌子、渡辺吉宗・好子 以上 29名

【担当幹事】武沢和義、三船幸子

ウトナイ湖探鳥会に参加して

2003. 3. 23 中 嶋 慶 子

うらかな春の陽をほっこり浴びて、人も鳥も自然も
 待ちわびた春の喜びをかくしきれないような1日でした。

今年は湖はいつもより氷が残っており、湖畔の入口と
 向う岸の一部が水面をみせていたけど、その狭い中に渡
 り鳥のおしゃべりがにぎやかでした。

オナガの集団が湖畔入口に陣どっており、オジロワシ
 が現れると一斉に飛び立ち、落着くと何もなかったよう
 に日なたほっこりで毛づくろい。仲間とのケンカ、すっ
 かりペアになっているもの、繁殖羽根の尾をピンと延
 ばしお嫁さん捜しをしているもの、なんともどかな風
 景です。

オオハクチョウが3、4羽で頭上すぐ上を羽音たて
 ていき、湖にプレーキをかかどでかけながら着水する姿
 は圧巻でした。そのそばにミコアイサ、ヒドリガモ、
 ホシハジロ、ヒシクイが色どりを添えていました。

向こう岸のかげろうの中にマガンがおり、声だけは
 こちら岸まで風が運んでくれている。今日の数で2,000
 羽ぐらいとのこと。マガンにとっては遠い春の様でど
 こまで北上しているのだろうと思います。

同じ仲間のヒシクイは岸辺でゆっくり見られるのに
 マガンの野生は本物のようで、人間にも他の鳥にも、
 自然にもこびず、しっかり距離を保っているマガンは
 私は好きです。

マガンのそばにはヨシガモのナポレオンの帽子の
 様なエメラルドグリーンが日に輝いており、時々カワ
 アイサのペアが着水。それを氷の上からオジロワシや
 オオワシがながめている。それを見ている私達。何
 人ともイラク戦争が3日前より始まっていることも
 忘れて幸せな1日でした。地

球上のどこにいても安心して暮らせるように祈らずにはいられない1日でもありました。

〒065-0032 札幌市東区北32条東2丁目1-14-504

【記録された鳥】アオサギ、トビ、オジロワシ、オオワシ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、ヨシガモ、コガモ、マガモ、オナガガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、カモメ、オオセグロカモメ、アカゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、スズメ、ハソボソガラス、ハシブトガラス、ドバト

以上 36種

【参加者】赤沼礼子、石田典也、板田孝弘、伊藤邦祐、稲垣敦之・嘉子、今村三枝子、岩崎孝博、白田 正、岡田幹夫、萩野裕子、片山 實・慶子、蒲澤鉄太郎、北山政人、栗林宏三、小西峰夫・扶美枝、小堀煌治、小山久一、佐野祐太、汐海嘉代恵、島田芳郎・陽子、高橋良直、高栗 勇、田中哲郎、戸津高保・以知子、道場 優、中嶋慶子、成澤里美、原 芳明、樋口孝城、広木朋子、松島雅之、松原寛直、村上トヨ、村田健次、山口和夫、山田良造、山本和昭、横山加奈子、吉田慶子、鷲田善幸、渡辺吉宗・好子

以上 47名

【担当幹事】栗林宏三、道場 優

野幌森林公園探鳥会
2003. 4.13 庄 山 紀久子

1月に初めて野鳥愛護会の探鳥会(野幌)に参加させていただきました。小雪の降る中、本当に野鳥なんて見れるのかと思っていたら、森の入口にある大きな木でじっとしているフクロウを観察することができました。はずかしながら、野幌にフクロウがいることを初めて知り、驚きました。まだ双眼鏡の使い方も不慣れたため、フィールドスコープをのぞかせてもらい、ゆっくり観察することができ、童心に返ってすっかり嬉しくなりました。その後も、キツキ類などいろいろな野鳥を身近にある野幌で観ることができ、今、再び探鳥会に参加しました。朝からあいにくの雨で野鳥の種類と数は少なかったようですが、湖沼できれいなオシドリやその他にもカモ類の姿を観ることができ満足感がありました。野鳥の他にも、早春の花々やサンショウウオの卵なども観察しつつ、野幌の自然を楽しみました。

まだまだビギナーですが、何回か参加させていただいてるうちに、自分で野鳥を見つけて見分けることができるのでは、と思っております。いろいろと教えて下さったみなさん、ありがとうございました。また、年間を通して野幌にも通って新しい発見をしたいと思っております

〒004-0054 札幌市厚別区厚別中央4条2丁目29-6-102

【記録された鳥】カイツブリ、アオサギ、トビ、オシドリ、コガモ、マガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、キジバト、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハクセキレイ、ミソサザイ、ククイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、カワラヒワ、ウソ、ハシブトガラス、ワシタカsp. 以上 26種

【参加者】赤沼礼子、岡田幹夫、小野寺貴子、稲垣敦之、井上公雄、今村三枝子、岩崎孝博、川村宣子、蒲澤鉄太郎、久志本アイ、後藤義民、小西美美枝、小山久一、斎藤正雄、島田芳郎・陽子、庄山紀久子、瀬賀勝人、高橋良直、田中志司子、武田千恵子、徳田恵美・和美、戸津高保、戸塚純子、長尾由美子、中正憲佳・弘子、中田勝義、原 芳明・美保、辺見敦子、安 真一郎、山口和夫、山田良造、横山加奈子、吉田慶子、松原寛直・敏子、水上砂恵子

以上 40名

【担当幹事】後藤義民、戸津高保

宮島沼探鳥会に参加して
2003. 4.20 松 島 雅 之

私が北海道で最も好きな物は、それはカニとアスパラ？いえ違いますサケとマガンです。勿論食べるわけでは有りません。サケは秋の溯上、マガンは春の北帰行。いずれも次の生命へ向けての旅立ちなのですが、前者は悲壮感が漂い、後者は明るくのどか、と全く対象的なイメージを受けるのは私だけでしょうか。

今回そんなマガン達を観察する「宮島沼探鳥会」に参加をさせていただく事ができました。探鳥会は10時からの開催予定になっていましたが、苫小牧からはるばるでかけるのだから早朝の「峠発ち」に立ち会ってやろうと前夜の夜から沼の側の駐車場に入る事にしました。

目が覚めたのは午前4時、駐車場に満杯の車でビックリおまけに観光バスまで、昨秋のラムサール条約指定に影響されたのでしょうか人気の高さはすごいものです。

早速、身支度を整えて出発、岸辺にはすでに大きなカメラをかまえた人たちが陣取っていたのでそのすぐ後ろに立って見る事にしました。

オーこれが5万羽！沼全体がマガンで埋まっている。おかげで本来警戒心の強い彼らに10メートルの近さまで迫って見る事ができる。待つ事30分、今まで散発的に飛び立って思い思いの方角に飛び立っていた彼らだったが、突然沼の向こう岸から地響きが湧き起こる、誰かが叫ぶ「来たぞお」、そして水面の一角が盛る、大きな一個の生き物のような固まりが空中に浮かび上がりそして渦を巻きながら明けきらない空の中に広がって行く。気が付くと全身に鳥肌がたっていました。

北海道野鳥愛護会の探鳥会に参加させていただくのは私にとって今回で3回目となります。9時を過ぎた頃から見覚えの有る顔がチラホラ。10時に探鳥会が始まる頃には朝出て行ったマガンたちもどンドン戻ってきて時間設定になるほどと感心させられました。

それより感心させられるのはこの沢山のマガンの中から珍しい種類を発見する能力、これには驚きます。「対岸の白い建物の中央から…」と教えられてさえ私にはなかなか発見できないのに。おかげでシジュウカラガン、マガンの変種、二代にわたって交雑した珍しいカモ等、自力ではなかなか見つけられない珍鳥を見せていただく事ができました。これから始まる最も良い季節、沢山ある探鳥会に是非参加をさせていただきたいと思っています。

〒053-0022 苫小牧市表町5丁目7-6 メゾンドグレース305

【記録された鳥】カイツブリ、アオサギ、トビ、オジロワシ、シジュウカラガン、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、マガモ、コガモ、カルガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、オグロシギ、カモメ、キジバト、ヒバリ、ハクセキレイ、アオジ、オオジュリン、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス 以上 27種

【参加者】荒木良一、池田亜樹子・池田あかり、石田典也、稲垣敦之・嘉子、犬飼 弘、井上公雄、板田孝弘、今泉秀吉、岩崎孝博、大表、大荒田忠良、岡田幹夫、荻野裕子、勝見輝夫・真知子、蒲澤鉄太郎・則子、亀井、亀山武志、岸谷美恵子、栗林宏三、小島佳子、笹谷俊章、佐藤幸典、清水朋子、庄山紀久子、鈴木正之・泰子、島田芳郎・陽子、高栗 勇、高橋良直、田子元樹、徳田恵美、戸津高保・以知子、富川 徹、中正憲信、成澤里美、新見 完、野村圭子、山崎カツエ、太丸リツ、原 芳明、樋口孝城・陽子、広木朋子、干場 清、松島雅之、松原寛直・敏子、村田静穂、村井章夫、山口和夫、山田良造、山本和昭、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子、渡辺吉宗・好子 以上63名

【担当幹事】佐藤幸典、田子元樹

藤の沢探鳥会

2003. 5. 3 郷 六 哲 雄

藤の沢の探鳥は今回が初めてです。前日より子供達(小3・小4)は楽しみにしてまるで遠足に行く気分でした。

子供達は西岡水源池・野幌原始林に次いで3度目の事なので、少しマンネリ化と心配の感もありましたが、親の余計な気遣いは取り越し苦労となりました。

今年は例年より寒く、桜の開花もまだでしたが、当日は暖かく絶好の探鳥日となり、子供達は大喜びで若干うるさくも感じるほどで、ほかの皆さんに迷惑をかけたかも知れませんが。この場をお借りしてお詫びいたします。

藤の沢は平地と思っておりましたが、標高300メートルの小山とは思いませんでしたので、家内は最初に笹藪をかき分けて入っていったので、困惑気味でした。

しかし、こぶしの白い花や、つぼみがピンク色に色づいた桜の蕾を見て、気を取り直して、鳥のさえずりに心を和ませ聞き入っておりました。

周りの方達が「あれはヒヨドリ、あれはハクセキレイ」と教えてもらっても、初心者悲しさ、区別がつかずキョロキョロするばかり。唯一解るのは、ウグイスのみというお粗末さでしたが、それはそれで楽しんでおりました。

初めて見たオオルリの色には驚き、アカゲラのドラミングに感動し、興奮しておりました。

最初はなかなか鳥を見つけれず、飛び立ってようやく見つけておりましたが、だんだん慣れて、頂上付近につく頃には私より先に見つける様になり、逆に教えられることが多くなってきて、頼もしさを感じました。

頂上付近ではキジバトを見つけ、思わず大きな声を上げてしまいました。

頂上に着くと、のどかさや今までの疲れも吹っ飛び、下界の騒音から離れて心が洗われ、清々しい気持ちになりました。

3時間ほどでしたが、子供達と一緒に有意義な時を過ごし、改めて自然の有意義さ、大切さを認識でき、久々に生きた時間を過ごす事ができました。

一緒に歩いて説明してくださった方々には感謝しております。

今後も出来るだけ時間を作り、家族で参加しようと思っております。その折はよろしくお願い致します。

〒003-0814 札幌市白石区菊水上町4条2丁目129-164

【記録された鳥】マガモ、キジバト、ツツドリ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、オオルリ、エナガ、ハシブトガラ、コガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カシラダカ、アオジ、カワラヒワ、イカル、ニューナイスズメ、スズメ、ハシブトガラス 以上 29種

【参加者】犬飼 弘、岡田幹夫、尾崎 脩、亀井厚子、勝俣征也・由美子、加藤文夫、川村宣子、蒲澤鉄太郎、郷六哲雄・ともみ・琢磨・玲名、後藤義民、小堀煌治、小山久一、品川睦生、佐々木裕、島田満里子、白澤昌彦、高橋良直、武沢和義・佐知子、戸津高保・以知子、中正憲信・弘子、温井日出夫・潤子、信田洋子、橋本和子・洸宏、樋口忠夫・和子、樋口孝城、広木朋子、松原寛直・敏子、向原博、村井章夫、村田静穂、山川美香、山田甚一、山田鉄義 以上 46名

【担当幹事】小堀煌治、岡田幹夫



【福 移】

2003年 7月 6日 (日)

殆どの鳥の繁殖のシーズンも終息の時期に入り、巣立って間もない幼鳥も、一人立ちに向って健気な姿を見せています。此処、福移の牧草地・

堤防河川敷地での探鳥会は、真夏に向って今年前半の山野、草原性の鳥の観察に一区切りになる会になります。

めっきり少なくなった草原性のシマアオジ。カッコウ、オオジュリン、ノビタキ、ベニマシコ、オオヨシキリ、コヨシキリ、モズ、アリスイ、石狩川岸の土手にコロニーを営むショウドウツバメや、イワツバメ、カワセミ、ノゴマ、牧草の刈り取り跡ではウズラなどが記録されています。

集 合 = 9時 市営バス福移入口停留所付近

交 通 = 地下鉄東豊線環状通東駅より、市営バス北札幌線福移入口下車

【野幌森林公園】

2003年 7月13日 (日)、9月14日 (日)

「野幌森林公園を歩きましょう」が通常の探鳥会として実施されます。「歩きましょう」は本会創立の昭和45年に会の中心的リーダーであった百武充さんの呼びかけによりいわば私設的な探鳥会として昨年まで開催してきましたが、通常の探鳥会と変わらない内容で実施してきていることから、本年度から通常の探鳥会として計画し実施されることになりました。

集 合 = 大沢口駐車場入口 午前9時

交 通 = 夕鉄バス (文京台線)

新札幌駅バスターミナル発「文京台西行き」

大沢口公園下車 徒歩5分

【鵲 川】

2003年 8月24日 (日)、9月7日 (日)

この時期には、もうすでにシベリア北東部の高緯度の地で繁殖を終え、越冬のため南へ渡りはじめているコチドリ、メダイチドリ、ダイゼン、チュウシャクシギ、キアシシギなどのシギ・チドリ類が、この鵲川の河口でも羽を休めています。近年、河口付近の海岸線の浸食が進み、干潟や湿地が減少し、シギ・チドリ類の渡来数も減少傾向にあります。チュウヒやオオタカも度々現れ、冬羽に衣替えたノビタキ、オオジュリン、時にはアジサシ、カワセミが見られることもあります。

集 合 = J R日高線鵲川駅前 午前9時30分

☆観察用具、筆記具、昼食、雨具などをご持参下さい。

☆交通機関をご利用の方は、各自でお確かめ下さい。

☆いずれの探鳥会も、余程の悪天候でない限り行います。

☆探鳥会の問い合わせは、

011-563-5158 白澤宅へ

鳥 民 だ よ り

◆ 写真展のご案内 ◆

愛護会会員の渋谷信六さんの野鳥写真展が以下にて開催されます。

「新川河口浜にて出会えたシギ・チドリ」

日 時 : 平成15年 8月 1日 (金) ~ 8月16日 (土)

場 所 : 光映堂 2階ギャラリー (ウエストフォー)

札幌市中央区大通西4丁目

◆ 野鳥写真出展作品目録 ◆

渋谷 信六	アカエリヒレアシシギ、アトリ
後藤 義民	クマガラ
山田 良造	シマアジ、アカゲラ
岸谷美恵子	イスカ、ショウドウツバメ
辻 正一	フクロウ、アオバズク
村上 トヨ	フクロウ、ムナグロ
志田 博明	オオハクチョウ、カワアイサ
片山 實	ケアシノスリ、コオバシギ
高橋 良直	キョウジョシギ、シマアオジ
小堀 煌治	ケアシノスリ、ベニヒワ
荒木 良一	ハクガン、ケアシノスリ
	以上 11名 21点

◆ 新しく会員になられた方 ◆

山本 雅晴	〒063-0843 札幌市西区八軒3条西5丁目2-27-33
西村 芽	〒064-0805 札幌市中央区南5条西27丁目1-20-205
原 芳明	〒007-0868 札幌市東区伏古8条3丁目2-35
畑 正輔	〒004-0032 札幌市厚別区上野幌2条5丁目2-13
中田 勝義	〒064-0919 札幌市中央区南19条西12丁目1-50
村井 章夫	〒001-0045 札幌市北区麻布町6丁目14-44

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円 (会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>